

2017年秋季大会（素核宇）を終えて

矢嶋 徹* <宇都宮大学大学院工学研究科 yajimat@is.utsunomiya-u.ac.jp>

1. はじめに

本年の秋季大会（素核宇）は、9月12日から15日まで宇都宮大学峰キャンパスで行われた。大会では16会場に分かれて94のセッションが行われ、1,325名の方の参加を得て、大きな事故もなく盛会のうちに終えることができた。また、9月18日に栃木県総合文化センターで市民科学講演会が行われ、約1,000名の市民の方に参加を頂き、大盛況であった。これも、宇都宮大学をはじめとして、関係機関や企業、講演会での講師の先生方、実行委員やアルバイター、事務局の方々、それに加えて何よりも参加者をはじめとする会員各位のご協力によるものである。実行委員長として、まずは心より深く御礼を申し上げたい。

宇都宮大学で物理学会が開催されるのは、1987年の「秋の分科会」以来、30年ぶりのことであった。当時のプログラム前付けが事務局資料として残っていたので、コピーを頂いて数えてみたところ、前回は9会場で39のセッションが行われており、セッション数だけで見ると倍以上の規模となっている。残念ながら当時の講演件数や参加者数までは調べられなかったので、外形的な数値の違いでしかないし、当時とは大会の実施体制などが異なるので単純な結論は禁物であるが、一面では物理学会に関連する分野の着実な広がりを見せているとも思われ、喜ばしい限りである。

さて、本稿では今回大会の実施を振り返って、開催に際して特記すべき事項や出てきた問題を検討して、反省材料としたい。このことにより、今後の大会運営に些かでもお役に立てればと考えている。

2. 開催の経緯と事前準備における問題

今回の大会開催の話をもっと最初に頂いたのは、2014年8月であった。早速宇都宮大学の規模を考えるとともに、学内で学術集会の実施状況を調べ、過去の状況や直近の他学会開催予定から見て、峰キャンパスで1,000名程度の大会であれば開催できそうだと判断した。最終的に素核宇の大会であれば引き受け可能と事務局へ返答したのが2015年4月である。このように、規模や実績から判断すると開催可能ではあったが、実施にあたっては予想外の困難があった。

最も大きな問題は、実行委員会の体制であった。前回は、峰キャンパスに常駐する多くの教員が実行委員であった。その後、異動や定年退職などで教員の変化が生じたため、今回は別キャンパスにある工学部の教員が委員の大部分を

占めた。このため、開催会場の詳細な事情をはじめ、会場ごとの事務窓口がどこかということすら皆目見当がつかない状態であった。そのため、繰り返し会場候補場所に足を運び、事前調査に努めた。また、過去に工学部に勤務されていた事務職員のつてをたどり、学内各所との連絡を図った。月並みではあるが、人間関係が最も効果的な解決策であった。

事前準備における最大の問題は、教室確保の時期である。物理学会では大会ごとに旅行代理店を選び、大学外業務を代行して頂いている。宿泊手配を委任するのはそのためであり、会期を早期に確定する必要がある。¹⁾ しかし、大学としては学内行事優先であり、早期には日程が決められず、相互に矛盾を起こしてしまう。最終的には学長に直接依頼して協力を取り付け、事前の会場確保を行うことができた。会場関係では借用料の問題も大きかった。開催を決定した際に大学に見積もってもらったが、その後さらに利用室数や時間帯の目処がついた段階で再計算を求めたところ、4倍近くもの差を生じてしまった。利用時間帯や利用室数が増えたこともあるが、最大の要因は消費税改正の前後に単価が変更されたことである。このため、各講演会場の利用時間を精査するなどの対応に追われることとなった。

聞くとところによると、必要な時期までに会場を確保できずに開催を断念した例や、他学会でも借用料が高額となって規模の縮小や会場の変更を迫られる例がある。大学を取り巻く環境を考えると、大規模な会合の開催に伴う困難は減ることはないだろう。このことにより、他のイベントと干渉する可能性も大きくなる。今回も事前の情報収集にもかかわらず、会期の一部が他の学会と重複してしまった。今後、事前調整を含めた大会開催の行程は、考慮が必要となるかもしれない点は気がかりである。

3. 今回大会での実施方針と試み

本年3月に行われた年次大会では、大阪大学の実行委員会による各種先進的な試みがなされた。²⁾ そのすべてを踏襲することはマンパワー的に無理であるため、できることを選別することからはじめた。たとえば、手荷物預かりは魅力的な試みで、参加者にとっても便利であるが、人員や場所の確保が難しいこと、試算により大きな赤字が不可避であることから断念することとなった。

今回実施した試みは、主に大会運営の「裏」に関することである。前述のように、会場賃料が予想よりも高騰してしまったため、費用の削減を迫られた。学会事務局の方と

* 実行委員会委員長

の連絡を通じて、会場利用時間にかなり削減余地があることがわかった。借用料は従量的であったため、主に会場設営のスケジュールを最適化して利用時間を短縮した。作業手順の見直しや文書化を徹底し、少人数でも効率的に準備できるようにした。これは最終日の撤収の際も同様である。会期中も利用しないフロアは閉鎖するなどの対応を行った。この結果、全体的に利用時間が減少し、かなりの額を節約できた。さらに副次的な効果として撤収作業がスムーズに進行し、レンタル品の返却や荷物の搬出に余裕を持って間に合う時間に作業が終了した。このように、会期中の作業には効率化の余地がかなりあるように思う。

ネットワーク環境の提供では、宇都宮大学ではeduroamの利用が最近可能になったこともあり、運用の試行的な意味も含めて全面的に担当部署の支援を頂いた。あいにくゲストアカウント発行が制度化されていないため、一時利用には「会議向け期間限定eduroamアカウント」の制度を利用することとなった。これにより、学内では主にネットワークのハード面の整備に注力することができる。期間限定アカウント発行は試行とのことであり、将来的にはどう発展するかは不明であるが、大学内でネットワーク提供の制度が未発達な場合には、利用を考慮しても良いと思われる。

4. 運営上現れた問題や反省点

さまざまな準備により会期に臨んだが、多くの問題が生じた。すべてを列挙することはできないので、3点ほどに絞って述べたい。

まず、会場までの交通に問題が多発したことである。市内交通は3社のバス路線が混在する複雑なものである。今回は大学周辺で最も運行頻度の高い会社に協力して頂くこととなった。しかし、間に代理店を介しての打ち合わせとなったため、JR駅でのバスの誘導に関しては、細部にわたって詰めることができず、参加者各位にご不便をお掛けする事態となり、申し訳なく思っている。外部との交渉には余裕を持ってあたれるよう、優先順位を上げるべきであった。

次に、案内を目的としてSNSを利用したが、効果的に運用できなかったことが残念である。担当委員が他の用務と兼業で、会期が迫るとそちらに手を取られたこと、案内すべき事項を整理する余裕がなかったことなどが主な原因である。しかし、忘れ物のアナウンスに有効であるなど、ある程度の役には立ったので、可能性は十分にある。

3つ目の問題は託児室の運営である。物理学会では外部の託児業者をその都度選んでいるが、昨今の社会情勢もあって、選定には紆余曲折を経た。最終的には大学の男女共同参画室から頂いた情報に基づき、託児室世話人の方に業者を選定して頂いたが、スケジュール的に綱渡りの状態であった。

以上のように、大きな問題は主に学内、委員会内よりも外部と関係する部分に起こっている。大会運営に必要な事項を精査してスケジュールに余裕を持ち、適切に対応することが必要であると今更ながら痛感した。

5. 市民科学講演会について

市民科学講演会では、早くから担当委員らによる作業が行われ、梶田隆章先生と村山斉先生に講演をお願いすることとなった。聴衆を引きつける魅力的な講演内容が期待できたため、広報活動に注力した。特に、会場が1,600名強を収容する非常に大きなものであったことから、聴衆の確保が問題となった。そこで、広報にあたっては中学生や高校生をメインターゲットとし、県内の中学高校にポスターやチラシを配布したほか、高校の先生方の研究会を通じて理系高校生に対して積極的に周知を図った。このような方法は効率を追求するためばかりではない。栃木県内には理学部を有する大学がないため、物理学をはじめとする理学諸分野への進路選択のアピールは弱くなりがちである。市民科学講演会は、次代を担う若年層に物理学の普及を図る意味でまさにうってつけの機会となった。

当日は天候も心配されたが、冒頭にも述べたように多くの聴衆を集めたこと、中高生のみならず一般の方々の来場も多かったことは特筆すべきことであった。講演会のテーマとなった話題をはじめ、科学的な情報に「飢えて」いる人が多いことがわかる。講演会後には講師の先生方にホール入口で質問にご対応頂いたが、中高生をはじめとする児童生徒からの質問が多かったこと、一般の方々からも単発の講演会であることを惜しむ声があったことなど、非常に印象深い行事となった。また、事前の地道な広報活動が奏功し、新聞やテレビニュースで取り上げられたことは非常に有り難いことであった。

6. 最後に

以上述べてきたように、今回の宇都宮大学での大会は、数々の問題を抱えながらも幸いにも最後まで実行できた。本学のような理学部のない小規模校で、普段使わないキャンパスで開催できたことは、1つのモデルケースとなり得るのではないかと考えたい。今後またいつか、たとえばさらに30年後、宇都宮大学に再び物理学会をお招きできるだろうか？大学を取り巻く環境には厳しいものがあり予断を許さないが、今回の条件下で開催できたことを考えると、会員が在籍さえすればその時々で対応できるだろう。それを期待することとして、今回の大会の開催報告を終えたい。

参考文献

- 1) 日本物理学会誌 **60**, 会告 (2005).
- 2) 山中 卓, 日本物理学会誌 **72**, 582 (2017).

(2017年11月13日原稿受付)

岩手で開催された秋季大会総括

吉澤 正人* 〈岩手大学理工学部 yoshizawa@iwate-u.ac.jp〉

9月21日(木)から24日(日)の日程で、岩手大学上田キャンパスを会場として、物性分野の秋季大会が開催されました。盛岡での物理学会は、1999年、2008年に引き続き今回で3回目。何かで測ったような9年毎の開催です。実は、2017年ではなく2年ほど前に行ってはという提案を頂きました。というのは、2011年に東日本大震災が発生し、沿岸は大きな被害を受けました。多くの人が東北を訪れる学会を開催して、復興の一助にしたいということがその当時の学会執行部の皆様の思いだったようです。2008年の学会から時間経っておらず、その提案は実現しませんでした。今回の開催に繋がりました。

物理学会の開催に関して、どの時期に何をやればよいかが開催マニュアルにしっかり書かれているので、開催数ヶ月前までは、ほぼ一人の仕事でこなせます。今回、私は実行委員長を勤めるにあたり、学会開催の負担を少なくしたいが、経験を引きついで貰いたいという気持ちから、雑務を分散させないようにしながら、仕事は分散させようと考えました。

開催の年になるまでは、学会事務局や旅行業者、観光協会などの外部機関との渉外や大学内の調整や調査が主な仕事。本当の作業は開催8ヶ月前頃からはじまります。そして、その作業量は、開催が近づくにつれてどんどん増えていきます。開催スケジュールに合わせた各担当の工程表を作成し、メールや毎月のチーフ会議で、工程の進捗を管理しながら準備を進めてゆきました。

開催8ヶ月前の1月からホームページ(HP)の作成を開始。コンテンツは実行委員に集めてもらいましたが、大学が後援に入っていることもあって、技術職員の方にデザインから作成までを職務としてお願いすることができました。HPの作成には村上武氏、デザインは藤崎聡美氏にお願いし、藤崎氏には案内看板や市民科学講演会のポスターのデザインもお願いして、素敵な仕上がりになりました。

6月に入るとプログラムの前付原稿の作成。少し苦労したのは、前付原稿に載せる地図の選定。インターネットにはさまざまなコンテンツはあるものの著作権の関係で使えないものがほとんど。結局、入試の募集要項の地図を採用。はじめての来訪者という点では、入学志願者と学会参加者は同じかもしれません。

7月には教室の機器の点検作業やPCとの接続テストの実施。いくつかの問題点が見つかり、大学に修理を依頼。

8月から9月にかけては、アルバイターマニュアルの作成。実は、アルバイターマニュアル作成をすっかり失念していました。学会事務局から、マニュアルは?のメールで気がつきました。金沢大学の実行委員会がTeX版を作成し、大阪大学が完成度の高いものを作っていたと聞いていたので、大阪大学の実行委員長の山中卓氏から提供してもらいました。DropBoxにファイルを置き、各担当が必要な箇所のみを修正するというこの形式を大いに活用させていただき、1~2週間でマニュアルを完成することができました。

さて、いよいよ、21日から学会がはじまると、「座長が来ていない。どのようにセッションをはじめたら良いか」、「プロジェクタや音響関係の調子が悪い」、「体調の優れない人がいる」などなどの問題や問い合わせが大会本部に寄せられました。2008年大会では救急車で運ばれた方もいたので、前もって近隣の病院に協力要請を行い、救急車やパトカーといった緊急自動車を学内に入れる手順や手続きも準備しましたが、今回は重篤の方はおられず、学内の保健管理センターで十分な対応をして頂きました。何よりでした。

トラブルの対処には、大阪大学の大会から設けられた「何でも屋」が役に立ちました。意外に多かったのはプロジェクタの不調。岩手大会会場の場合、30会場の内、6会場が色むらなど不良で予備機器と交換しました。どの大学もプロジェクタは授業に多く用いられています。それらが経年劣化し、そろそろメンテナンスの時期にきているのかもしれませんが、今回は5台の予備機を準備していましたが、講演のスケジュールを勘案して使い回してしのぎました。アルバイター諸君もそれぞれの仕事に一緒に懸命取り組んでくれました。

ここからは、大会の経験で得たことや遭遇したこと、反省点を書きたいと思います。盛岡市内の宿泊可能数が約3,000人。1999年の大会では、宮城県境付近からの宿泊者もあり、2008年の場合も岩手山麓の温泉郷からの宿泊者もありましたが、ホテルの宿泊可能施設が増えたことで、今回は盛岡ないしその近郊で宿泊者を吸収できると予想していました。しかし、実際には、この時期は一般観光客も多く、遠くでの宿泊を余儀なくされた方や日帰りの方も多く、申し訳ない限りでした。開催時期を設定するにあたり、他の学会と重なっていないかどうかのチェックは特に綿密に行なったつもりでいたのですが、肝心の盛岡での学会はノーチェックでした。というより、盛岡観光コンベンション協会(MTCA)がその辺のコントロールをしていると思い込んでいたのが間違い。旅行業者がホテルの確保する時

* 実行委員会委員長



図1 講演会場風景.



図2 昼食、休憩風景.



図3 市民科学講演会.

になってはじめて、5千人規模の医学系の大きな大会が同時期に開催されることが判明したのです。急遽、開催時期を移動しましたが、宇都宮大学で開催される素核宇分野の大会、物性関係の他の大会なども連動して動かして頂くことになり、ご迷惑をおかけしました。改めて、関係各位にお詫びしたいと思います。

さて、今回の学会の開催に際して、盛岡市から、盛岡での宿泊者数に応じた金額が補助される予定です。学会を多く誘致したいという自治体の思いから、この制度は近年創設されました。大学からも全面的なバックアップを頂きました。教室の確保は学務を通じて行った他は、後援や名義使用、使用料関係などなど、財務から総務に至る業務を、大学側の窓口を一本化して対応して頂きました。

しかし、少し残念な点もありました。岩手大学では、学会開催は共催ではなく全て「後援」で対応するという事になっていました。共催では大学から学会運営に人を割く必要があるなどの理由のためからと思われますが、後援の場合、学会の開催を大学から発信しないという縛りがあることが、開催をマスコミに発信する時になって判明しました。大学が学会開催を引き受ける一つのメリットは市民への宣伝効果。学会員が運営を引き受ける動機の一つもやはり、学内外への自分の研究分野のアピールではないでしょうか。市民科学講演会についても、関係団体に後援を取り付け、県内高校へのポスターの送付を通じて宣伝は行いましたが、来場者は予想より少なめでした。素晴らしい講師の方に講演を引き受けて頂いたので、若者の理科離れが懸念される昨今、学会開催をアピール、基礎科学の魅力を伝える宣伝をもう一押ししたかったところです。

さて、物理学会は、懇親会を行わない数少ない学会かもしれません。その分、夜の盛岡は賑わったことと思います。MTCAは学会歓迎ポスターを市内の多くの飲食店に配布しました。欲をいえば、ポスターの下に割り引きクーポンでも付けて欲しかったところです。イブニングセッションは、物理学会にとって重要なイベントです。夜の盛岡は、美

味しい物あり、宿泊ホテルの周りに飲食店は多く、秋の盛岡を大いに満喫して頂き、また、学会後も東北各地や沿岸地域へ足を運んで頂けたとしたら、学会の当初のくろみ通り、震災の復興に大いに助けとなって頂けたと思います。

今回の開催にあたり、ノウハウを引きついで貰いたいと思い、各係の長（チーフ）を主に准教授クラスの方をお願いしました。小林悟氏には講演会場の設備・機器の点検など会場全般の管理を、中西良樹氏には案内看板やビラ作成の他に、成田晋也氏と共に市民科学講演会の企画をお願いしました。瓜生誠司氏には食堂や売店関係の渉外、食事関係の取り纏めを、向川政治氏には展示会業者と大学の間の調整や渉外をお願いしました。内藤智之氏にはアルバイターマニュアルの作成から雇用関係を引き受けて頂きました。西崎滋氏には託児室選定からの業者とのやりとりなど、西館数芽氏にはインターネットやホームページ関係でお世話になりました。参加者へのインターネットの提供について、情報基盤センターと共に考えて頂きました。その他、副委員長の松川倫明氏と藤代博之氏には会期中の運営を、中山敦子氏には経理を統括して頂きました。本大会へ参加して良かったという感想を頂けるとしたら、これらのチーフの皆さんと、個々には挙げませんが、共に頑張ってくれた実行委員の働きが大きかったと思います。また、川村光会長、勝本信吾担当理事、学会事務局職員をはじめとする皆さんの大きな協力があったことは言うまでもありません。

今回の宇都宮と盛岡で行われた秋季大会の参加登録者は3,353名でした。内訳は、一般会員1,929名、学生会員1,313名、非会員111名。1999年大会と比較するとかなりの減、2008年大会からも暫減していると思います。学会の参加人数はその分野でのアクティブな研究者の数に比例すると思いますので、少し心配な傾向ではあります。ともあれ、無事に大会を終了できたことは何より。参加して下さいました方、ご協力頂いた多くの皆様へ心より御礼を申し上げます。

(2017年11月12日原稿受付)